

隱元禪師と中日両黄檗山の由来

梵 輝 著
西尾賢隆 訳

唐の天宝十二年（七五三）、鑑真和尚は六十六歳の高齡で日本に東渡し法を弘め、律宗を起す。九百年後、清の順治十一年（一六五七）、福建の黄檗山万福寺の高僧隱元禪師は、また六十三歳の高齡で東渡し禪を伝え、黄檗宗を起す。この二つの事は、前後して光り輝き、そのめぐみは万世に及ぶ。

隱元、名は隆琦、明神宗万曆二十年（一五九二）福建省福清県に生まれる。父の名は林德竜、母は龔氏。三人兄弟で、隱元は三男、もとの名は曾昇、字は子房。六歳の時、父親は楚に出かけて帰って来ず、一家は苦しみの日々を送った。九歳郷里の中峰社で書を学んだが、翌年には学校を止めなくてはならなく、家で兄を助けて農耕に従事し、生計を保った。二十一歳、彼は母親が彼のために用意した結婚資金を旅費とし、父親を捜しに出かけた。初め南京の母方のおじの家に至り、再び浙江・寧波

に赴いたが、父親の行方について、何ら知りえなかった。万曆四十二年（一六一四）、二十三歳の隱元は、觀音の聖地普陀山に至って、この山の風景の静寂幽邃、寺院の莊嚴なるを見て、たちまち俗念が取り払われ、善根が成熟し、潮音洞に投じ行者に充てられた。この時彼の心には出家の念が萌したが、老母が家にいることでまだ果せなかった。二年目の三月故郷に帰り、母に勧めて仏を奉じさせた。これから母子とも念仏持斎の生活を送った。母親が亡くなった後になって、やっと隱元は黄檗山に至り鑑源興寿禪師に従って出家した。この時彼は已に二十九歳であった。出家の後、道を訪ね師を尋ね、経を聴き教えを学んだ。彼の参学の所は、主に浙江の各名刹であり、例えば嘉興県の興善寺、海塩県の雲岫庵、峽石山の碧雲寺、秦駐山の積善庵等である。参学中に、非常に多くの疑問を持った。のちほど天台山通玄寺に第一等の密

雲円悟禪師がおられると聞くや、彼は赴き拝見し、疑問を解こうと心をきめた。当時円悟は金粟山広慧寺に転住したところで、隠元はそこに行き彼に参拝した。禅機も因縁もびたりとあうことから、隠元はこの寺に留まり懸命に修行し、仏道を成就しようとした。

円悟は禅学に見識があり、当時の禅宗の大立者であり、盛名は遠くへ伝わり、各地から道を慕ってやって来る僧徒は竟に七百人の多きに達した。隠元は円悟の指導の下で、参禅し究明に力を尽し、二年の後のある冬の日、窓から一陳の寒風が吹き込んだとたん、心が清涼となり、豁然として悟があり、これから疑問が氷釈し、道行が大いに進んだ。崇禎二年（一六二九）安居解制の後、金粟山に眠乞いし、狄秋庵の住持に任ぜられた。冬、また召されて金粟山に帰り知客の役につく。

崇禎三年春、円悟は要請を受けて福建の黄檗山万福寺に至り住持に任ぜられ、隠元も随侍して閩に帰る。翌年獅子岩にしばらく滞在し、大いに禅法を弘めた。崇禎六年十月、円悟の法嗣費隠通容（一五九三——一六六一）が黄檗山の住持に任ぜられると、隠元は西堂に任ぜられ、二人の心が通いあい、びたりと一致した。崇禎十年、隠元は四十三歳で、正式に費隠の法嗣になり、この年二月獅子岩に帰った。彼は黄檗山と獅子岩の間を往来し、続

けて参禅し教えを究めることが、前後七年であった。崇禎十年一月一日、大衆の要請を受け入れ黄檗山の住持となった。隠元は在職期間中、力を伽藍の再建に傾ける。

崇禎十三年大雄宝殿を再建し、以前の大殿を改めて法堂と為し、あわせて齋堂・鐘楼・鼓楼・三門・香積厨・庫房等大小三十余の殿堂を建設し、黄檗山を頓に規模宏大な十方叢林とさせ、四方の仏教徒は、噂を聞いてやって来た。崇禎十五年七月円悟は天台神通玄寺で示寂し、隠元は黄檗山の建造が一段落告げるということで、かくて寺務を法弟の亘信（行弥）に委ね、天童に至り円悟の墓塔を祭り掃き清め、あわせて費隠を見舞った。嘉興の崇徳県福嚴寺で冬を過す。冬安居を終った後、翌年福州に帰り、長楽県竜泉寺を重興した。ついで、大衆の懇請を受け入れ、順治三年（一六四六）正月十五日再び黄檗の法席を主り、各殿堂を再建し、寺産を増置して、一百畝から増して四百余畝にした。

この寺は日本黄檗宗の祖庭であり、唐の貞元五年（七八九）に創建されてから現在まで一千二百年の歴史があり、禅宗六祖慧能の法嗣正幹禪師によって開創された。もとの名は般若堂、のち改めて建徳禪寺・万福寺と称する。黄檗希運禪師（？——八五六）が住持に任ぜられた時、はじめて黄檗を山名と為す。その後、南嶽下の怡山

檣庵(？——八八三) 青原下の黄山月輪(八五二——九二五)が前後この山に住持したことがある。宋・元代では興隆と衰微を繰り返した。明の洪武二十三年(一三九〇)大休禪師により法堂・大雄宝殿・天寶殿等が改修された。嘉靖三十四年(一五五五)戦乱により寺が燬ける。隆慶年間(一五六七——一五七二)正円禪師は復興を志し、同時に神宗に藏経を賜わるように奏請し、彼は北京で八年待ったが、まだ果さずに亡くなった。その法孫の鏡源・鑑源の二人により遺志が継承され、万曆四十二年(一六一四)宰相葉向高の助けを得て、全藏六七八箱を手に入れ、黄檗山に運び込んだ。万曆四十六年鏡源、天啓六年鑑源と前後円寂した。その後、隆密・隆瑞が相繼いで住持し復興を進めた。崇禎三年(一六三〇)円悟禪師が来寺し、費隱・隠元が住持の時になって後、はじめで万福寺復興の大事業が完成した。

福建の黄檗山が鬱然たる一大叢林となったのは、円悟・費隱・隠元の祖孫三代の経営増築と不可分のものである。特に隠元禪師は、この山に往来することが二十余年で、道風の被るところ、遠近をいとわず帰依し、また要請に応じて日本に赴き京都の宇治の新黄檗を開創し、そのうえ黄檗の宗風を東隣に伝播させ、いっそうの輝かしさを加えた。

順治九年(一六五二)、日本長崎の興福寺第三代住持逸然と「唐三寺」の檀越頼川官兵衛・林仁兵衛・頼川藤左衛門・渤海久兵衛・彭城兵衛・張立賢・何懋齡・許鼎・程国祥・高応科・陳明徳らとが連名で隠元禪師に日本に赴き法を弘めるよう招聘する。しかし当時費隱の引き留めによってまだ果せなかった。逸然らがまた第二回目の懇請を作したが、招聘状を途中で盗賊に出あって無くしてしまい、第二回目には両函を連作し、僧を派遣して閩に行かせ要請した。隠元は日本に赴き法を弘めるのが仏教徒の要務であると考え、費隱の同意を求めて、かくてこの年十二月一日に返信し逸然らに因縁の成熟したことを述べ、東渡を決心した。

順治十一年(一六五四)五月十日、隠元は黄檗山で辞衆上堂を行ない、住持職を慧門如沛にまかせる。その日黄檗から出発し、六月三日厦門に到達し、中左(厦門)の仙岩に滞在し、便船を待ちうけた。この年五月抗清の將師延平郡王鄭成功は、隠元が東渡弘法するということを聞いて、賛同を表わし、出資して援助し、あわせて其の厦門の堂兄鄭採らに囑して参謁させた。六月二十一日鄭成功の軍船(当時、国姓爺船と呼んだ)は厦門から出発し、隠元ら三十人がこの船に乗り東渡する。七月五日の晩に、長崎に無事に着き、第二日の夜あけ、逸然を初

めとする長崎「唐三寺」の僧徒ら数千人の歓迎を受ける。その日のうちに東明山興福寺で開堂演法し、僧俗男女が頂礼膜拜し、往来が引き続いて絶え間なく、一時の盛を極めた。

隠元に従い、東渡したものには独言(性聞)・慧林(性機)・大眉(性善)・独吼(性獅)・独湛(性瑩)・南源(性派)・古石(性栄)・惟一(道実)・雪機(定然)・揚津・良哉・良健・良静・独痴・誠善・宗苑・惟聴・慧満・元福等三十人がある。また携帯したものに大量の経書・名人の書画・雕刻・医療及び植物の種子等がある。

彼が持ってきたふじ豆・蓮花は、今に至るまで「隠元豆」、「黄檗蓮」と呼ばれている。また煎茶と精進料理の方法を伝えた。この年隠元は興福寺で冬を越し、寺内に中国僧三十数人、日本僧七十数人がいた。第二年目の春、僧徒は倍に増え、このため外堂・茅屋と三門を建立し、あわせて東明山の額を掛けた。五月何高材・王引等の懇請に応じて、崇福寺に至り經典を講じ、これから興福と崇福両寺の間に往来し、講經說法し、大衆を導いて修禪した。隠元禪師のような徳望が高く深く、そのうえ禪定の働きが深い高僧が日本に來ると、仏教徒達はみなこのうえない喜びを感じ、彼を「古仏の西來」といった。

この年九月、隠元は京都妙心寺の竜溪・仙寿寺禿翁・

竜華寺竹印ら日本の名僧の懇請に応じて、摂津(大阪府)富田(今の高槻市)の慈雲山普門寺に至り開堂演法し、ここに住すること五年半で、頂礼帰依する者は潮のように溢れた。秩序を維持するために、幕府の手配により、禪師に見えようと思うものはまず当地の寺院管理所において申請書を提出したのち、はじめて普門寺に入ることができた。その寺に集まった日本僧のうち二百人だけを許し、俗人の参見するものは、また竜溪ら三人の認可を経なければならなかった。この時後水尾天皇及び京都所司代板倉重宗らはみな禪師に帰依した。

ちようど隠元が日本にあって名声が大いに振った時にあたり、福建黄檗山の無得海寧・慧門如沛・虚白性願らは書信をよこし、彼が早く帰国し祖庭を維持するように懇願し、その伝法師費隠も書信をよこし催促した。しかし日本の僧徒竜溪らは懇切に引き留め隠元はただ鑑真にない、日本に留まり弘法するしかなかった。

日本万治元年(一六五八)十一月一日、隠元は江戸城で日本の幕府家綱將軍にお目にかゝった。当時僧俗とも禪師のために京都付近で新寺の計画をなし、進展しはじめ。第二年目の五月八日、徳川第四代將軍家綱を檀越とし、隠元禪師を開山とする黄檗山新寺が正式に建設されることになり、黄檗山万福寺と名付け、隠元の報国懐

郷の思いを慰める。この後、中日の禅僧のうちでは福建の祖寺を古黄檗と呼び、日本の新寺を新黄檗と呼んだ。

新黄檗命名の後、また西方丈・職事寮・香積厨等の堂宇を増築し、同年閏八月二十九日晋山の儀式を挙げた。

十一月四日、隠元の七十歳の誕生日にあたり、全山の僧徒が齋会を設け、寿文・寿詩を贈り、祝賀を表した。

新黄檗の建造物の第一段階の完成後、仏像を作りはじめる。隠元が日本に来てのち、日本の寺院の仏像の容貌に不満を感じた。この時おりよく仏像をこしらえる中国の名匠苑道生が日本に来たので、隠元は彼に宇治黄檗山に来て、新寺の仏像をこしらえてくれるよう願った。また隠元の「寿蔵」を建造し、あわせて西域の木で「寿像」一体を雕刻する。これが現在なお開山堂に奉安されている隠元像である。

寛文三年、また放生池を開削した。かくて新寺の規模は次第に完備し、掛錫の僧徒もまた大いに増加し、冬の結制（冬安居）には毎年五百人に近い参加がある。この年冬の結制中に、黄檗山第一回の三壇大戒が伝授され、説戒師隠元・羯磨師木庵・教授師即非・尊証師大眉・独吼・慧林・独湛・高泉・碧岷・戒元・竜溪・南源・書記曉堂である。この名簿中、竜溪を除いた外はみな中国僧である。これから以後、黄檗山の歴代住持は、晋山の後、

三、四年のうちに、必ず伝戒を行なうのを慣例とした。隠元が黄檗の戒壇を創始する際に、一組の伝戒を指導する儀軌——『弘戒法儀』を編纂した。

寛文四年、隠元は新寺の住持職を木庵に委託し、自身は松隠堂に退院した。木庵は十七年もの長きに渡り、住持となり、黄檗山の建造物を継続完成させるのに、大いなる貢献がある。

隠元は黄檗での開法に、仏教を崇信する後水尾法皇の懇ろな御配慮を受ける。寛文三年五月、隠元が後水尾に禅要の奉答をなした。五年十月、後水尾は隠元に香木と金子を下賜する。第二年目の六月、また舍利殿を建て贈られ、寛文七年になり落成した（これより後、今日まで、後水尾法皇の忌辰は、いつも舍利殿で行なわれる）。寛文十三年二月、錦織の大悲図と香木を賜わる。後水尾の隠元禪師に対する敬慕はここにその一斑を見てとれる。

寛文十一年、隠元八十歳、全山の僧徒が住持木庵に上堂を願い、嗣法の門人および四方の碩徳がみな詩を読み寿を祝った。あらゆる祝賀の詩文は『黄檗開山隠老和尚八十寿章』に編集し、世に行なわれた。この年、隠元は自ら体力が日に衰え、生きているのも長くないことを覺り、十二月八日——仏成道の日、黄檗山の亀鑑とするために、『遺囑語并規約』を作った。その前言は十ヶ条

からなり、高泉編修の『隠元和尚黄檗清規』のなかに収録されている。また黄檗山の鐘銘・三門の扁額を書いた妙高峰等黄檗十二景に題詞を書き、最後の留下の墨跡をなし、あわせて身辺の文献を整理した。二年目、隠元八十二歳、古黄檗と諸護法者に遺語と詩偈を寄せた。四月一日家綱將軍に謝偈を書いた。後水尾法皇は隠元を封じて、「大光普照国師」とする。寛文十三年（一六七三）四月三日、門弟達の見守る中、溘然として円寂した。嗣法の門人は無得海寧等二十三人、うち隠元と日本に到った七人と、日本僧龍溪性潜・独照性円・独本性源の三人とで、新黄檗の法嗣は十人で、十大弟子と称される。

隠元禪師の著作は、その門人により記録編纂されて書となり、あわせて四十余种、百五十数巻で、各種の刊本と手抄本とがあり、三百数年来、中日両国で流伝し替らない。近年日本の学者平久保章は現存の隠元の全著作を搜集し、隠元全集、全十二の巨冊を編成し、一九七九年一〇月東京開明書院から影印発行した。この書は全面的に隠元の著作を結集し、その編纂と出版は、明末清初の際の中日両国の仏教・禪宗史を研究するのに貴重な資料を提供した。また両国仏教界の文化交流に有益な貢献を為した。

隠元禪師の亡くなって後、彼の弟子達は遺命を受け継

ぎ、黄檗の禪風をして大に扶桑を扇がせ、別に一派黄檗宗を形成した。しかも黄檗山万福寺の初期の住持も多くは中国からの渡来僧により担われた。

黄檗山万福寺第二代の住持は隠元の弟子木庵性瑫で、彼は福建晋江県の人である。泉州開元寺で出家し、かつて鼓山湧泉寺の永覺禪師に従い参学し、のち福清黄檗山万福寺の首座に任ぜられ、順治十二年（一六五五）東渡し、日本の寛文四年（一六六四）、京都黄檗山万福寺の住持を引きつぎ、期間は十七年の長きに達した。寛文十年、紫雲山瑞聖寺を創建し、その寺の開山となり、のちまた海福寺の住持を兼務し、延宝八年退院し、貞亨元年（一六八四）円寂した。世寿七十四、『語録』『全録』があり世に行なわれる。隠元と木庵が黄檗に住持していた時、即非禪師は有用な助手であり、彼は福建福清県の人で、以前に黄檗山の書記を勤めた。のち福州の雪峰に至り参学し、順治十四年（一六五七）東渡し、第二年の十一月迎えられて長崎崇福寺の中興住持となり、寛文三年（一六六三）黄檗山に上り法化を助け興した。木庵と即非は隠元下の二甘露門と称えられ、当時の人々は「隠元の徳、木庵の道、即非の禪」といった。三人は兼ねて詩文及び書法に通じ、自ら一家を成し、現在に至るまで中日両国はなお彼らの墨跡を宝蔵している。

第三代住持慧林（福清県の人）、第四代独湛（莆田代県の人）、第五代高泉（福清の人）、第六代千呆以下悦山・悦峰・靈源・旭如・独文・杲堂、十三代竺庵に至るまで、みな福建東渡の中國僧で、第十四代を日本僧竜統元棟とし、十五代と十八代はいずれも中國僧大鵬の住持（泉州の人）であり、第二十代伯珣、第二十一代大成も中國僧で、其のほかは日本僧により住持され、現在伝えて五十六代に至る。

日本の黄檗宗は開宗してより以来、三百数年がたち、宗風が殷盛し、門徒が多くなり、日本の各地において、黄檗宗に属する寺院は五百数ヶ寺に上る。一九七九年一月、日本黄檗宗の各寺は宗議会議長吉井鳩峰を団長とする「古黄檗拝塔友好訪中団」を結成し、わざわざ福建黄檗山万福禪寺に来て塔を拝し祖師を礼した。今年四月、日中友好臨済黄檗協会第一次「友好之翼」訪華団の來臨があり、中日両黄檗山の香火の因縁を深めると同時に、兩國人民の伝統の友誼を發展させるのにみな新たな貢献をなした。

中日兩國仏教徒の間の法情友誼は、遠く遡る。祖師の徳に思いをはせ、策勵してここに至る。我々は今日さらに我々の先人が架けた友誼の橋を強固にするため努めねばならない。

注

- (1) 「唐三寺」は「三福寺」ともいい、日本長崎内に中國僧により建てられた興福寺と福濟寺・崇福寺とをさす。

〔訳者付記〕

本稿は一九八一年四月三〇日に出版された『法音』一九八一年二期に掲載されたものを訳出したものである。『法音』は中國仏教協會の機関誌で年四回発行されている。

執筆者紹介 Ⅱ

- 金井徳幸 ①宋代宗教社会史研究②立正大学文学部（Ⅱ部）講師③宋代の郷社と土地神（「中嶋先生古稀記念論集」一九八〇年）、宋代の村社と社神（「東洋史研究」三八巻二号）。
- 林 信明 ①社会学②花園大学文学部助教授③「兒童福祉の研究」（共著、永田文昌堂、一九八〇年）。達磨多羅論（「禪文化研究所紀要」一二号、P・ドミエヴィル著）、祖堂集の世界（P・ドミエヴィル著「花園大学研究紀要」一二号）、神會語録とチベット宗論（P・ドミエヴィル著、「禪学研究」六〇号）。